

中上健次の〈アジア〉思想

亀有 碧

要旨

本稿は、中上健次が残した〈アジア〉にかんするエッセイや対談の記述をたどり、そこでどのような思想が育まれていたのかを明らかにするものである。生まれ故郷の被差別部落を舞台にした作品群で知られるこの昭和の作家、中上健次(一九四六—一九九二)は、韓国をはじめとするアジア諸国の文化に強い関心をもち、それを紹介する多くのエッセイを残した人物でもあった。一方で近年、中上の〈アジア〉への言及は、そこに潜む帝国主義的眼差しを批判されはじめている。本稿では、中上の執筆期間全体における〈アジア〉にたいする言及を通時的にまとめ、その変遷を明らかにするとともに、同時代の思想からの影響関係を示すことで、帝国主義的傾向とその矛盾について文脈化すると同時に、中上の〈アジア〉思想を網羅的に把握しようと試みた。具体的には、中上の〈アジア〉思想が、小説家としての自己の言語表現の限界を見きわめ、その外へと踏みだそうとする衝迫にもとづくものであったこと、そして〈アジア〉を語る自らの言説自体への絶え間ない自己批評性によって、島尾敏雄や吉本隆明、山口昌男らの思想を受容しながら変容を繰り返してきたことを示した。

キーワード：中上健次，島尾敏雄，吉本隆明，山口昌男，南方的想像力，韓国，フィリピン

1. 中上健次の〈アジア〉思想という問題

本稿は、中上健次が残した〈アジア〉にかんするエッセイや対談の記述を通時的にたどり、そこでどのような思想が育まれていたのかを明らかにするものである。生まれ故郷の被差別部落を舞台にした作品群で知られるこの昭和の作家、中上健次(一九四六—一九九二)は、韓国をはじめとするアジア諸国の文化に強い関心をもち、それを紹介する多くのエッセイを残した人物でもあった。彼の〈アジア〉への関心は、一九七〇年代後半以降の彼の生活を決定づけている。毎年のように、また一年に何度も、韓国やフィリピン等を訪れた経験は、韓国を舞台にした『物語ソウル』(一九八四)や、作中人物たちが台湾やフィリピンへ移動する「異族」(一九八四—一九九二)など中上の後期作品の

ほとんどに関係しており、中上作品研究においては看過できないものである。また、一九八一年に名古屋とのオリンピック開催地争いにソウルが勝利し、一九八四年、NHKで「アンニョンハシムニカ・ハングル講座」が放送されはじめるなど韓国ブームの黎明期、植民地あるいは戦場としてではなく対等に相對する隣国としての存在が東アジア圏にとらえられはじめていたころ、中上の思想は先陣を切るものとして、同時代日本の思想空間に一定の影響を与えたと思われる。したがって現在、これまでの日本における〈アジア〉にたいする思考の軌跡を批判的に再検討するうえでも再考されるべきものだろう。

近年、中上の〈アジア〉への言及は、そこに潜む帝国主義的眼差しを批判されはじめてきている。浅野麗は中上研究史をまとめる論考において、一九九〇年代以降の中上研究に「マイノリティをめぐる政治学を射程に据えた議論」¹が増加していると指摘した上で、中上の韓国理解を批判する同時代論考を発掘し、現在「中上の〈植民地主義〉的姿勢についての指摘に応答し、作品を批判的に検討する必要は、まだ残っている」²と述べている。浅野が挙げるのは、在日朝鮮人小説家の梁石日の論考である³。梁は、繰り返かし、中上が盟友柄谷行人にあてて自身の韓国体験を伝える手紙形式で発表したエッセイ「柄谷行人への手紙」（一九八一）にある、次の一節を批判している。

パンソリや仮面劇について民俗学からの考察、文化人類学からの考察が皆無に近く、学者に訊ねてもただの思いつきの類をしゃべっているだけではないかと苛立ち、韓国には一人の柳田国男も一人の折口信夫も、南方熊楠もないのだろうか、黄金の宝の山にいて黄金を石のように蹴つとばしていると唾然とする [後略]⁴

梁の一連の批判を要約すれば、「民俗学」や「文化人類学」の観点から朝鮮文化を称賛すると同時に、そのような批評が韓国内部から発せられていない現状をなげく中上のこの記述には、韓国が支配されてきたことや、発表同時代もその過去と地続きであるということへの歴史認識が欠落しているという。なぜなら、他ならぬ民俗学者を含む日本帝国主義こそが、朝鮮人による朝鮮文化の実践を禁じ、朝鮮人自身にもそれを後進的なものとみなさせるような土壌を築いたからである。そのことを無視する中上に、日本帝国主義と地続きの支配的 eye-difference を読みとる梁の、そして同じ箇所と同じように反論してきた識者たちの批判はもっともなものである⁵。中上の韓国・朝鮮にたいする賛美には、そしておそらく、同じ調子で語られる他のアジア諸国にたいする賛美にも、日本の加害者性を我がごととして受けとめ、その延長線上に同時代のアジア諸国をとらえようという態度がみえない。

ただし中上の〈アジア〉への言及には、これらの批判が掬いあげなかった、わずかに矛盾する言説が、たえず付きまとっている。たとえば前述の「柄谷行人への手紙」は、以下のように書きはじめられているのである。

韓国に滞在して五ヵ月目になる。五ヵ月目にして韓国がまた私の理解の届かないところに行ってしまった気がして、三日前に移ったばかりのホテルのロビーにあるカフェテリアに坐って、考え込んでしまっている。大兄の手紙、拝読した、大兄の使う「根底の不在」、言葉を変えてみれば、物語の氾濫、多極的多重的なパースペクティブ、パースペクティブという言葉すら物の用をなさないあらゆる物のカーニヴァルの林立、私が今、感知しているのは韓国にあるその氾濫、その林立が波を打っておしよせ、そしていつの間にか干潮の干潟のように異国人である私一人、ここに取り残されているという思いである。⁶

この冒頭には、韓国・朝鮮文化の理解者かつ擁護者としての高慢な顔ではなく、むしろその意味の掴めなさに慄く一人の「異国人」の姿があらわれている。「根底の不在」とは、柄谷行人が韓国文学の分析に用いた言葉である⁷。近代日本文学がもつ「風景」や「告白」、「内面」、「表現」といった諸般の制度の幻想から自由であり、一つの意味や歴史に収斂しない韓国文学の言葉のありようを指している。しかしここで中上はこの言葉を、そうした文学・文化分析の結語としてではなく、他者たる韓国が理解不可能な多義性をはらんで目の前にあることへの率直な驚きの表現として用いている。先の引用で推奨されていたはずの「民俗学からの考察、文化人類学からの考察」が、この地では「物の用をなさない」ことに中上はすでに気づいている。つまりここには、中上の〈アジア〉思想のもつ自己矛盾が現われているのだが、先行研究はこうした詳細にまでは踏みこんでいない。

中上の〈アジア〉思想に、かつての支配者である日本人の無知と傲慢さを読みとることはたやすいが、そこからはこのように矛盾に満ちた論全体の紆余曲折をとらえることはできない。なによりも、中上が生涯を通じて〈アジア〉にかかずらいつづけてきた情熱の発条をとらえることができない。中上にも近い作家、島尾敏雄による南西諸島の民俗風土にかんする言及について鈴木直子は、「度しがたい本土知識人の自己欺瞞であると断罪して切り捨てるのではなく、島尾の戦後四〇年余の軌跡全体を、まさに本土の戦後史そのものとして読むこと」⁸ が求められていると論じている。鈴木の方法論に従えば、中上についても〈アジア〉への言及がいかに始まり、どう変遷していったのかという軌跡をとらえる必要があるだろう。

管見の限り、中上の〈アジア〉思想にたいする先行研究は、一地域もしくは一時代を対象とする部分的なものにとどまっており、中上の執筆期間全体を視野に入れたものはみられない。そこで本稿では、中上の〈アジア〉にたいする思想を通時的にまとめ、その変遷を明らかにするとともに、同時代の思想潮流からの影響関係を示す。具体的には、エッセイを中心に、第二節では一九六〇年代後半から一九七〇年代前半の言説を、第三節では一九七八年、第四節では八〇年代初頭、第五節では八五年前後の言説をまとめる。

以上の作業を通じて、近年指摘されてきた帝国主義的傾向とその矛盾について文脈化すると同時に、中上の〈アジア〉思想を網羅的に把握する第一歩としたい。

2. 一九六〇年代後半から一九七〇年代——ベトナム反戦運動から「遠く離れて」

中上健次の〈アジア〉にたいする言及は、ベトナム戦争反対運動にはじまる。一九六六年、中上一九歳の頃に発表された「われらは主張する」と題されたエッセイでは、一九六五年六月二六日のベトナム侵略反対デモにて「アメリカはベトナムから手をひけ」「アジアから出てゆけ」と「カー杯さげんだ」⁹ ことが回想され、「ベトナムの人々を殺し、苦しませ、飢えさせる侵略軍の味方をしようとする日本と云う国家は、一体誰のための国家なのだろう？」¹⁰ と問われている。アメリカ軍の後方基地として、間接的にベトナム戦争へ関与していた戦後日本の加害者性を自覚し、異議を申したてているのである。中上は一九六七年にも早稲田のブント系学生とともに、第二次羽田闘争、王子野戦病院反対闘争、成田空港反対闘争等のベトナム反戦運動に参加することになる¹¹。

しかし彼は、反戦運動家の立場に安住することはできなかった。一九六八年に連続して発表された、「季節」という語をタイトルに含む詩作群において、「この詩はもぬけのからっぽ馬鹿八丁であります」¹²、「なんと俺の声はそらぞらしいことかなあ」¹³ と自らの言葉を相対化する語り手は、郷里にある「熊野川」に連なる「海」へと引きよせられていく¹⁴。一編には、「季節あるいはベトナムから遠く離れて」という詩題が付されており¹⁵、自らの創作活動への自己批判と郷里熊野への帰還が同時に、ベトナム反戦運動からの離脱へと通じたことが想像される。一九七〇年に、全日空の子会社、国際空港事業株式会社に就職したことが決定的な転機となる。羽田とは、ベトナム戦争反対運動の牙城であり、勤務はその規制線の向こう側で、ときにベトナムの戦場へと送られるクリスマスケーキや弾薬といった米軍貨物の積みおろしを行うものだった¹⁶。中上は、補給基地日本の片棒を担ぐ職へと従事することになったのである。

反戦運動からの脱却をもたらした羽田体験は長らく、自身の文学的基盤を形作ったものとして記憶されていたようだ。事実、羽田体験が「アジア人としてのにがい気持」¹⁷ をもたらすものだったことは、一九七六年に発表されたエッセイ「作家と肉体」において、さほど掘りさげられていない。その反面、ここで強調されているのは、羽田での勤務が、彼の小説観を決定づける「〈物の思想〉と言うやつを、たたき込まれた」¹⁸ 時間だったということである。〈物の思想〉ないし〈物〉の世界については詳述する紙幅の余裕がないが、それは、小説を「書く」ことに代表される形而上的な次元とは対立する、「生身の肉体」や「自然」といった次元を指し、文盲だった母の記憶と結びついて提示されている¹⁹。一九七〇年代の中上の小説論は、『紀州・木の国 根の国物語』（一九七八）に至るまで、こうした書き言葉の世界の外部をいかに小説へと組みこむかを問うていた。

このようにして〈アジア〉への共感を手放すことと引きかえに、自らの文学へと傾斜

していくことを契機に、中上において〈アジア〉と文学は奇妙な縁で結ばれることとなるのである。私たちが、中上の〈アジア〉関与を問う眼で先のエッセイ「作家と肉体」を再読するとき、〈物〉思想が、ベトナム戦争にたいする日本の加害者性を自覚し、感傷する感受性を、良くも悪くも封印すべく働いた可能性に思っていたらだろう。航空会社職員にとって弾薬が一個の貨物に過ぎないのと同様、物理的因果を全肯定し、思惟を拒む〈物〉の次元においては、戦争も後方支援も、国家間の必然的な利害調整でしかないのである。以後、創作も含め、ベトナム戦争および〈アジア〉への言及はしばらくなくなる。一九六八年、郷里での体験を基盤とする「少年の文学」を書くことを選んだ反面、「青年の文学へのこころざしを一時あきらめた」²⁰と書いた中上の胸中に、閉ざされた〈アジア〉への志向が沈殿していたことは想像に難くない。

3. 一九七八年——〈アジア〉への回帰

再び〈アジア〉が中上の言説空間にあらわれるのは、〈アジア〉への言及を排除することと引きかえに論じられていた〈物〉思想が、一個の文学論へと発展することとパラレルである。中上は、一九七九年から一九八三年まで断続的に連載した評論「物語の系譜」において、日本語に埋めこまれた思考の定型を「法、制度つまり物語」²¹と呼び、それを自明なものとして閑却する「この国の近代にはびこる人間中心主義、『文学』主義」²²を批判すべく、日本近代文学史を点検していく。背景には、文化の深層構造を見いださんとする構造主義と、その更新をもくろむポスト構造主義が同時に輸入された批評空間からの影響があった²³。そこで中上は、既存の「法・制度」を「逆立ち」させる可能性をもった別の「法・制度」に「アジア的」という形容を付与する。ここにおいて、小説家としての自分自身を相対化する試みの延長線上で、さきに〈物〉の世界としてとらえられていた被差別部落が〈アジア〉の一部として論じられはじめることになる。

アジア的とは農耕によって加重される変化や進歩のない状態、交通の途絶えた状態を言う事である。土俗とはアジア的物語＝法・制度の最たるものである。民俗学も文化人類学もこのアジア的物語＝法・制度を確認する事以外にない。また、アジア的法・制度は、文化、芸能の本体でもある。[中略]「開かれた豊かな文学」と題して講演しながら被差別部落春日町で私が眼にしたのは、まさにアジア的物語＝法・制度の抑圧下にいる春日町の特異性だったのである。[中略]アジア的法・制度下にいるここで眼にしたのは、〈交通〉の途絶、無時間、それに母権的家族形態である。²⁴

ここに言明されているとおり、この時期の〈アジア〉とは、「〈交通〉の途絶、無時間、それに母権的家族形態」という三つの条件によって説明される。「〈交通〉の途絶」とは、

共同体外の人との交わりが失われた閉鎖的状況を、「無時間」とは線型的な進歩史観に当てはまらぬ無発展を指す。「土俗」の一語もみえるように、これらの条件はおおよそ、前近代性を示唆すると言ってよいだろう。こうした〈アジア〉的状況にもとづく「アジア的物語＝法・制度」として、悪漢や靈異についての語りや唄による語りといった具体的な話型が分析されていくのだった。

近代日本を相対化するものとして、前近代的な〈アジア〉を発見する中上の背景にはなにがあったか。代表的なものは、先の引用中にもみえている「民俗学」や「文化人類学」の影響である。村井紀は一九六〇年代末以降、沖縄本土復帰に向かう歴史的潮流において、南西諸島に「原日本」を見いだす民俗学的言説、すなわち「南島イデオロギー」が流行したと論じている²⁵。たとえば島尾敏雄は、日本列島を南西諸島との連続性のうちに位置づける「ヤポネシア」という新たな地域概念を創出し、吉本隆明は、南西諸島の「古代的」文化風俗を評価する南島論を執筆していた²⁶。石川則夫によれば、彼らの南島論は、「日本再発見」や「相対化」を志向していた²⁷。そのために、直接的に日本の戦争責任や戦後体制に言及するのではなく、南西諸島の文化や生産方式を前近代的かつ普遍的なものとして提示していた。

中上が〈アジア〉への言及を再開する一九七八年一月、先に挙げたエッセイ『紀州・木の国 根の国物語』の連載を終えた中上は、島尾敏雄とはじめて対談している。中上は島尾との対談において真っ先に、ヤポネシア論を通じてどのような新たな「日本」がみえたのかと水を向けている²⁸。中上はのちに、ヤポネシア論を、「万世一系といわれる天皇家」を「中心とみて、中心に向かって求心的に収斂していく日本文化のとらえ方」とは相対する、「日本のなかの非常に重要な要素である南方的性格」²⁹に注目するものとも評価しており、「闇の国家」たる「紀州」に着眼してきたことの延長線上で、既存の「日本」像を相対化したり、あるいは新たな「日本」像を探ったりする術としてヤポネシア論を受容していたことがうかがえる。

島尾との対談を終えた一九七八年六月、中上ははじめて韓国と沖縄へ取材にわたる。沖縄とセットにされたところにヤポネシア論の影響が垣間みえよう。中上は、日本に今は無き「芸術と物語の根」をもとめて渡韓し、パンソリや仮面劇を観劇したり、日韓文化の比較論を発表していた李御寧や、金両基から直接の講義を受けたりしたと、連載エッセイ「風景の向こうへ 韓国の旅」(一九七八)に記録している³⁰。中根隆行はここに、韓国を「いわば故郷の原風景とも呼べるであろうノスタルジックなイメージ」として把握していく「異文化への憧憬」と、「隣国に対する加害」への自覚にもとづく「自文化に対する異和」が書きこまれているが、しかしそのいずれも「ともに日本に対する言説を基盤にして成り立って」おり、いま在る韓国それ自体の現実を捨象してしまう傾向があると指摘している³¹。日本相対化を目的とした異文化の描写が、対象を見落とすことにも通じ、また実は日本中心主義と表裏一体でありうることには、南島イデオロギーにた

いして村井紀がなした鋭い批判がそのまま適用できる。村井紀は、南島イデオロギーが日本の同質性を仮想し、そのために琉球を「鑄型に流し込」³² むものだと鋭く批判している。中上は自らの語る韓国が、日本を相対化するものとして、日本の過去や、被差別部落など日本内部のマージナルなものから類推された、想像上のトポスでしかないことに、いまだ無自覚だった。

さらに同年一〇月、中上は自らが中心となって開催した公開講座において、吉本隆明が、沖縄に残る母系制社会の様態と、マルクスに定義された「アジア的」生産形態の概念を、いずれも国家以前の制度として紹介するのを聴く³³。先に述べたように、吉本隆明もまた、島尾を引きつつ、沖縄に母系制社会の残滓を見いだすことで、当時、本土復帰に揺れる沖縄に、国家をも相対化しうる前国家的な性質を与えようとしていた。反国家・反天皇制のプロジェクトに組みこまれた吉本の「南島論」・「アジア論」は、中上の〈アジア〉思想に多大な影響を与えていく。翌一九七九年、中上は「私が、物語＝法・制度に、アジア的というアイデアを冠して説明しなおそうと思いだめたのは、去年、紀州熊野の被差別部落で連続公開講座を開催した折、第八回目のゲスト講師に招いた吉本隆明氏の講演による」³⁴ と述べた上で、先に引用したとおり「〈交通〉の途絶、無時間、それに母権的家族形態」の三条件によって〈アジア〉的なるものを定義している。ここには、吉本が南方的要素として挙げた母系制と、「アジア的」要素として挙げた共同体の閉鎖性が混在しており、それゆえに並べられた三項の論理的接続があいまいである。中上の〈アジア〉思想とは、この時点において、被差別部落にたいする認識と、島尾や吉本の着想をないまぜにした、つぎはぎの理論であったといえよう。

一九七八年の〈アジア〉への回帰において、中上は求心的な日本国家の構造およびそのうえに成りたつ日本文学という制度を解体すべく、それに相対するのに十分な新たな地図を地球儀のうえに描こうとしていた。それは、戦後日本が「積極的な関係の再構築を留保してきた」³⁵ 近隣諸国との関係を、あらためて結びなおそうとしたものとして評価できるかもしれない。また、すでにベトナム反戦運動下に養われた日本の加害者性への自覚が、東アジア反日武装戦線のような暴力的な反日主義へとも行きついていたころ、マージナルな生活文化の普遍性を説く民俗学的言説は、あらためて文学と〈アジア〉を接続する意義を中上に発見させたのである。しかしながら同時に、中上の〈アジア〉思想は、日本とは別個に具体的に存在しつづける韓国を、反日本の鑄型に押しこめてしまうものでもあった。梁とともに同時代から中上を批判した久保覚が、韓国・朝鮮の立場から「ようするに中上健次は、韓国とその民俗芸術を刺激的な記号としてしか扱っていない」し、「朝鮮の歴史にも、また、分断状況に苦悩し、呻吟している朝鮮半島全体の現実の人間の存在にもなんら関心がないのだ」³⁶ と断罪するのは正しい。

4. 一九八三年——〈南〉の創出

一九八一年、中上は韓国のソウル特別市汝矣島の示範アパートに単身で半年間滞在し、文芸誌『韓国文芸』の編集長を務めていた全玉淑女史にサポートされながら、韓国人文学者たちとの交流を深めていく³⁷。このころから、前近代性によって〈アジア〉を条件づけようとする言説のなかには、それらとは相いれない多義性の印象が紛れこんでいく。たとえば、韓国滞在中に発表されたエッセイ「物語が輪舞する」（一九八一）では、「綺麗にスマートに見事なほどアジア的特性を脱色し、如何なる通過儀礼もないのっぺらぼうの社会」³⁸ たる近代日本にいる者を、韓国は「治療し、抱きとめ、愛してくれる」³⁹ と評す。ここまでは一九七八年から続く身ぶりであるが、続けて、「この国の庶民の風俗、アジュモニ（おばさん）やアジシ（おじさん）でござったがえす市場や街頭の風景が、一九八一年の現代でありながら王朝期の庶民の風俗をかいまみさせ [中略] 物語作者には日本の王朝期を推測させ、そう推測した途端にパースペクティブを壊され物語がここに輪舞しているとしか言いようのない状態が現出する」⁴⁰ とも述べる。韓国の生活文化とは、分析しようとするパースペクティブを破壊させるような「多極的多重的」⁴¹ なものである。

韓国を条件づける欲望と、韓国がその条件からはみ出していくことへの驚きにひき裂かれ、矛盾含みの言説が生みだされていく。本稿冒頭に挙げた「物語の氾濫、多極的多重的なパースペクティブ、パースペクティブという言葉すら物の用をなさないあらゆる物のカーニヴァルの林立」という表現がみられる「柄谷行人への手紙」も同年に発表されている。韓国人作家尹興吉との対談『東洋に位置する』（一九八一）では、「韓国語はさまざまなメッセージ、記号の束みみたいなもので、われわれの頭で整理しきれないような、捉えきれないような記号の束みみたいなものを僕に与えてくれる」、「文化が、僕の目からみると、過剰に、ほんとうにあり過ぎるんです」⁴² との語りもみられ、韓国の他者性を「多極的多重的」と表現していることがわかる。

一九八三年ごろから、中上は〈アジア〉に代わって〈南〉という概念を用いて、その多義性を、人々の想像し、語る行為の産物として理論化しはじめる。この前後に中上は、日本国内ではじまった韓国ブーム⁴³ に抗うように、インドからイギリスに至るユーラシア大陸横断バス旅行に参加したり、フィリピンやバリ島を複数回訪れたり、韓国以外のアジア諸国へ足を伸ばしはじめていた⁴⁴。連載エッセイ「もうひとつの国」の第一回目「光と翳」（一九八三）では、「熊野」の気候風土が「沖縄や奄美のような南島の印象」のあることをふまえ、「熊野」や「沖縄」、「奄美」、「フィリピン」、「インドネシア」を含む「黒潮」の水域を〈南〉と定義する⁴⁵。それ自体は、ヤポネシア論とよく似た凡庸なものであるが、〈南〉の一部であるはずの「熊野」にたいして、矛盾する言説がすぐにあらわれてもいる。

那智滝は生命の象徴になって曼陀羅図に表われる。[中略] さらに私が注目するのは、そこから一種、遠近法の歪曲のようなものが見えてくる事である。部分が全体であるという考えだ。盆栽の松や石は自然の一部でありながら、それは自然そのものである。那智大社の御札は那智大社の発行する一つの札にすぎないのに、那智の神威そのものを表す。[中略] いや、熊野そのものが、その遠近法の歪曲によって出来上っている。黄泉の国と言われ、根の国に最も近いところとされ、熊野詣の昔、そこへ行って帰還する事自体が仮死の体験だった事を考えるなら、熊野は共同幻想である。在って同時に無い。近づけば近づくほど遠ざかる。⁴⁶

ここでは、熊野三山の一社である那智大社とその御神体である那智滝を描く那智参詣曼陀羅や盆栽、御札を例に、「熊野」の特色が挙げられている。それは「部分が全体である」という「遠近法の歪曲」、すなわち「近づけば近づくほど遠ざかる」という距離感の無化、さらには「在って同時に無い」という存在性の混濁である。「熊野」について述べられるのと同じように、「もうひとつの国」第四回目の「南の記憶Ⅰ」（一九八四）では、〈南〉の特質は「物事が環流し、しかも両義的である」⁴⁷ ことだと論じている。つまり〈南〉とは、それを説明しようとする記述をたえず無効化してしまうような、相対する特色が並立する場なのである。

〈南〉は、その発想の出発点にあった民俗学由来の南島イメージ、すなわち母系制や海洋性のイメージを残存させつつも、それとは相矛盾する多義的なイメージが混在し、フォークナーやラテンアメリカの作家たちを含む世界文学的な視野の広がりをもつ概念である。さらには、近代の産物としても語られるようになる。たとえば、「フォークナー、繁茂する南」（一九八五）においては、複雑な血縁関係、噂の入りみだれる共同体、馬車・汽車・車の発達した交通状況の三つを、〈南〉の要素と定義している⁴⁸。ここには、交通の途絶した状態を〈アジア〉と定義した一九七八年時点の思想との明らかな差異がみえる。新たな三要素の共通項は、多義的であることだ。

周縁的な場が多義性を担うという〈南〉のアイディアの背後には、山口昌男による構造主義的な文化人類学からの影響が透けてみえる。山口は、一九七五年刊行の『文化と両義性』において、「我々の概念は、文化の中心に位置する、または近い事象であればあるほど一元的であって、差異性の強調がなされる。それに対して、周縁的な事物についての概念は、それが明確な意識から遠ざかっているゆえに、『曖昧性』を帯びている。曖昧というのは多義的であるということに他ならない」⁴⁹ と述べている。山口によれば、こうした事象の根底には、周縁を再生産しながら、一方でそれを秩序づけることで自らを維持する、「文化のプラクシス」⁵⁰ がある。中上は、韓国から帰国後の一九八一年一〇月、山口とともにパンソリ公演を企画したことを皮切りに、一九八四年にはバリ島や韓国への旅行をともにしていた⁵¹。

ただし、山口が多義性を〈文化〉以前の原初的狀態や〈文化〉の余白にとらえていたのにたいし、中上は〈文化〉的プラクシスによってこそ生まれるものだと考えていたようだ。すなわち多義性とは、先に挙げた引用箇所「熊野は共同幻想である」と述べられているとおり、人々の想像し、語る営為によってうまれるものなのだ。「熊野」は、熊野信仰の聖地として種々の物語に語られてきたトポスであり、通常の世界とは異なる「黄泉の国」、「根の国」と差異化されてきた。それ自体に本質をもつのではなく、マジオリティによって恣意的に他者化され語られてきた、それによって自身も与えられた自画像を受容したり演技したりすることによって様々な意味を担うのが、「熊野」、ひいては〈アジア〉である。だからこそ、地理的概念としての〈アジア〉という語ではなく、〈南〉というそれ自体に実体のない、方角を指す言葉が頻用されることになる。同時代、第三世界の勃興と共に表面化していた南北問題は、〈南〉の一語を、〈北〉による政治的経済的収奪との相対的關係において規定してもいた。中上にとっての〈南〉とは、〈北〉による語りと想像との相関のなかにのみ、たち現われる共同体なのだ。韓国滞在中に得られた、素朴な理解不可能性の感覚は、山口昌男を咀嚼しつつ、韓国を〈アジア〉として対象化し、語ろうとする自分自身のプラクシスにたいする自己批評性を呼びこみはじめていた。

5. 一九八三年以後——〈南〉を語ること

〈南〉を語りの産物として思考するならば、小説家として語ることを生業とする自らの営みを問題化することは避けて通れない。中上はまず、自らの記述の普遍性を疑い、個人的経験のレベルへと退却しようとする。篠山紀信とのコラボレーションで発表された『輪舞する、ソウル』（一九八五）では、自身が「日本人の内に遠い記憶としてある韓国、遺伝子のレベルで行なわれた刷り込みのような韓国」⁵²を対象にし、「意識がどのように韓国をとらえ考えようと、結局はその脳髄の中に刷り込まれた認識を超えるものではない」⁵³こと、韓国とは自分の似姿ではあるが実は全く正反対な「鏡像」⁵⁴であることを冒頭に確認したうえで、「これから、韓国総体を一般的に論じるというのではなく、私一個の韓国との交渉をのべ、いままで一人の日本人としてどのように韓国を知り、さながら神隠しにあうように鏡の向こうの世界に踏み込み、迷い、その迷う事自体を養分として今に至っているのか、自己解体の気迫も込めて書いてみる」⁵⁵と、自己と韓国との交渉の軌跡に言葉を費やす。しかし、中上は即座に民俗学的記述へと舞いもどり、堂々めぐりをはじめている。在日韓国人と結婚した姉の経験を参照するしかないほど、「私一個」と呼べるような個人的交渉の経験は、中上と韓国のあいだには無かったからだろう。

次なる試みは、〈南〉をとことん空虚で無意味な言葉によって指示しようとすることである。ユーラシア大陸横断の取材旅行を振りかえって執筆された連載エッセイ『スペイン・キャラバンを捜して』において、当初あらゆる地域の「土着の子」⁵⁶を自称していた中上は、一九八四年に次のようなエピソードを記している。通りすがりの蒙古系

アフガン人が、中上を土着の子だと見あやまって視線を投げかけてくる。中上は「自分がジンギスカンの末裔で」「同族の戦闘の指揮を取る為にやって来たような気」⁵⁷ がして、「ベラマッチャ。スンダラへ」という言葉を投げかける。「使った本人にも意味不明だが、いわばどこへ行っても土着の子である私の思いを込めた言葉なのだ」⁵⁸ というように、この言葉は、中上にとっては、あらゆる場所の土着たる語り手が土着たちを指揮するときに必要な、一種の普遍的な言葉として「思いを込め」創出されている。しかし現実には、その言葉を聞いた彼は「アホな男など相手に出来ないと、クルリと背を向け」⁵⁹ 去っていく。あらゆる「土着」を指揮するはずの言葉は、誰にも共有されえない無意味な言葉でしかない。しかし中上は、「いいさ」⁶⁰ とつぶやく。なにがしかの共通する〈アジア〉の条件をとらえようとするかつての思想からは訣別しつつ、それでもなお言葉によって対象と関係を持つようとするために、もはや誰にも伝わらない言葉を発するのである。

「スパニッシュ・キャラバンを捜してⅢ」（一九八五）にみられる、以下のような過剰に叙情的な〈南〉の定義もまた、そうした無意味な言葉を発する営為としてとらえられる。

暖かく、血がとくとくと波うち、自由で、愉悦に充ち、そして真摯である。それらは往々にして抑圧されたり、差別されたりした場所であるが、そこは人として生れて〈北〉のように硬直し、強圧的なものに与しない誇りにみちた場所でもある。〈南〉はどこにでもある。⁶¹

ここでは、〈北〉の対義語であり、被差別の場所であるということ以外に〈南〉が定義されていない。言い換えれば、〈南〉はなんら本質的な条件を与えられていない。唯一あるのは、「暖かく、血がとくとくと波うち、自由で、愉悦に充ち、そして真摯である」というきわめて抽象的な賛辞だけである。奇妙にも、この引用部のあとには、「たとえばこうだ」⁶² と唐突にパリ滞在中の出来事が想起される。部屋の鍵が開かず、近くのカフェにいた清掃人夫に英語とボディ・ランゲージで開け方を尋ねるも、まったく意図が通じない。フランス語のできる友人にあとから聞くと、彼は中上が鍵の自慢をしていると誤解していたのだった⁶³。このように中上は、〈南〉を上滑りする言葉によって表現する一方で、その言葉の通じない世界への大きな穴をのぞきこんでいた。

無意味な言葉のかたわらに、その言葉の通じない領域をかいまみせているこれらのエッセイは、中上が〈アジア〉から〈南〉へと呼びかえながらもかかずらいつづけてきたものが、小説家としての自己の言語表現の限界を見きわめ、その外へと踏みだそうとする衝動だったのだと伝えているようだ。すでに確認したとおり、中上と〈アジア〉の出会いはベトナム戦争にはじまる。しかしのちに、学生運動からの距離をとる過程で、〈ア

ジア〉への言及を封印した。引きかえに立ちあらわれた〈物〉の世界とは、被差別部落に代表される、書き言葉から隔絶してきた世界であった。〈物〉の世界をつうじて自らの言葉に変革をもたらそうとする試みは、一九七八年、〈物〉を包含するかたちで、反近代・反文学としての〈アジア〉を立ちあげるに至る。一九八三年、〈アジア〉は〈南〉と呼ばれかえられることで、そのものの内部の本質的条件を失うかわりに、〈南〉を〈南〉として語る自分自身の営為をも問題化する装置となる。ここに一貫するのは、小説家としての自らによってたつ言葉の制度を、その外部の発見によって相対化しようとする態度である。中上は上に挙げた一連のエッセイにおいて、無意味な言葉で〈南〉を名ざしながら、同時に言葉の外部を並置して示すことで、言葉の限界と、しかし言葉をもって関係を結ぼうとする意思の双方を言語化しようとしていた。中上にとっての〈アジア〉ひいては〈南〉とは、書くことへの安住を許さない、自己批評の場だったのだ。

6. おわりに

本稿はこれまで、一九六〇年代から一九八〇年代に至るまでの、中上健次の〈アジア〉思想の変遷をたどってきた。中上の〈アジア〉思想は、〈アジア〉を語る自らの言説自体を疑うかのように、島尾敏雄や吉本隆明、山口昌男らの思想を受容しながら、絶え間ない変容を繰り返してきた。たとえば、〈アジア〉が〈南〉と言いかえられた一九八三年を境に、たんに地理的な守備範囲の拡張にとどまらない位相の変容が起きていたことが明らかになった。これは、浅田彰が〈南〉に「交通の途絶」と「リゾーム的なネットワーク」の両義性があるとまとめているように⁶⁴、これまで整理されてこなかった点である。また、こうした変容の軌跡に照らしあわせるならば、梁らが問題にしてきた一九八〇年代前半の言説はその過渡期にあたり、〈アジア〉を条件づけようとする強引さと、〈南〉の多義性へのとまどいが混在していることが読みとれる。

本稿では、小説を分析することまではできなかったが、一九八四には『物語ソウル』、一九八六年には「町よ、ソウル イテウォンの女」、一九八八年には「踊り子イメルダ」等、韓国やフィリピンを舞台にする小説が相次いで発表されている。〈アジア〉思想が、いかなる小説表現を生みだしていったのかを明らかにすることを、今後の課題としたい。

註

- ¹ 浅野麗「これから中上健次を論じるために」、『中上健次集十』、インスクリプト、二〇一七年、五頁。
- ² 同論文、六頁。
- ³ 浅野が挙げているのは、梁石日「中上健次における“近代”の倒錯——韓国に行って何を見てきたのか？」（『アジア的身体』、平凡社、一九九九年、六五一―八三頁、初出は、一九八二年）

- である。梁はほかにも、「民俗学なんて知らないよ」（『アジア的身体』、前掲書、八四一九〇頁、初出は、一九八三年）において中上を批判しており、ここではその両論文を参照する。
- 4 中上健次「柄谷行人への手紙」、『中上健次全集一五』、集英社、一九九六年、一〇六頁（初出は、『韓国文藝』一九八一年）。
 - 5 ほかに在日朝鮮人でもあり朝鮮芸能研究者の久保覚による「中上健次は軽蔑に値する」（『水牛通信』一九八二年七月号、三七号、二一九頁）や、梁石日・宮崎学・三上治による鼎談「アジア的身体論をどう考えるのか」（『情況 第三期』二卷四号、二〇〇一年五月、三四一五四頁）においても該当箇所が繰り返され批判されている。
 - 6 中上健次「柄谷行人への手紙」、前掲論文、一〇〇—一〇一頁。
 - 7 柄谷行人「中上健次への手紙」、『坂口安吾と中上健次（講談社文芸文庫）』、講談社、一三九—一四五頁（初出は、『韓国文芸』一九八一年）。
 - 8 鈴木直子「シマオタイチョウを探して—『ヤポネシア論』への視座—」、『南島へ 南島から—一島尾敏雄研究』、和泉書院、二〇〇五年、一七五頁。
 - 9 中上健次「われらは主張する」、『中上健次全集一四』、集英社、一九九六年、七二頁（初出は、『さんで—ジャーナル』一九六六年）。
 - 10 同論文、七三頁。
 - 11 高山文彦『エレクトラ—中上健次の生涯』、文藝春秋、二〇一〇年、一一—一二二頁。
 - 12 中上健次「季節に関する報告及び反歌」、『中上健次全集一四』、前掲書、四三頁（初出は、『さんで—ジャーナル』一九六八年）。
 - 13 中上健次「夜（形而下学的考察による季節への詩論）」、同書、四五頁（初出は、『さんで—ジャーナル』一九六八年）。
 - 14 中上健次「海へ」（『中上健次全集一』、集英社、一九九五年、五三一—七八頁、初出は、『文藝首都』一九六七年）や、中上健次「季節への提言及び悲歌」（『中上健次全集一四』、前掲書、四六一—四七頁、初出は、『さんで—ジャーナル』一九六八年）を参照。
 - 15 中上健次「季節あるいはベトナムから遠く離れて」、同書、四二頁（初出は、『さんで—ジャーナル』一九六八年）。
 - 16 中上健次・尹興吉『東洋に位置する』、作品社、一九八一年、七三—七四頁。
 - 17 同書、七四頁。
 - 18 中上健次「作家と肉体」、『中上健次全集一四』、前掲書、二〇〇頁（初出は、『文藝春秋』一九七六年）。
 - 19 ここでは、羽田での肉体労働が雨や雪といった自然環境に生身で接する経験であったこと、その一方で小説執筆が「はずかしくてしようがなかったこと」、その羞恥心の根に、「物の世界から離れ、小説を書いたり読んだりすることは、すなわちノイローゼになることであり、結局は自殺にいたる」と考えていた「(唯物主義)」の母の影響があったことが回想されている（同論

- 文、二〇二頁)。
- 20 中上健次「角材の世代の不幸」、『別冊太陽 日本のこころ一九九 中上健次』、平凡社、二〇一二年、一七四頁(初出は、『新潮』一九六八年)。
 - 21 中上健次「物語の系譜 谷崎潤一郎」、『中上健次全集一五』、前掲書、一四一頁(初出は、『國文學 解釈と教材の研究』一九七九年)。
 - 22 中上健次「物語の系譜 上田秋成」、同書、一五六頁(初出は、『國文學 解釈と教材の研究』一九七九年)。
 - 23 蓮實重彦は、「物語としての法——シリーズ、中上健次、後藤明生」(『現代思想』一九七七年八月号、一二一—一三九頁)等において、以上のようなポスト構造主義的観点から、中上作品に埋めこまれた〈物語〉の定型とそれへの抗いを読みとっていた。彼らによる批評潮流と中上の創作は、以後相互に影響しあいつづけていく。
 - 24 中上健次「物語の系譜 上田秋成」、前掲論文、一七三頁。
 - 25 村井紀「南島イデオロギーの発生」、『南島イデオロギーの発生——柳田国男と植民地主義』、福武書店、一九九二年、一一—一二頁。
 - 26 ヤポネシア論は一九六一年にはじまったとされるが、一九七〇年に発表された谷川健一の論考「〈ヤポネシア〉とは何か」(『日本読書新聞』)によって広まった(花田俊典「ヤポネシアのはじまり—島尾敏雄の『日本』地図—、『沖縄はゴジラか—〈反〉・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア』、花書院、二〇〇六年、二三九—二五三頁)。吉本の南島論も、同じく一九七〇年に「南島論——家族・親族・国家の論理」(『展望』一九七〇年二月号、一四四号、七八—一一四頁)としてまとめられた。
 - 27 石川則夫「島尾敏雄の『ヤポネシア』論：その起源へ」、『國學院雑誌』一一八巻一号、二〇一七年、七二頁。
 - 28 中上健次・島尾敏雄「風土を見る目」、『中上健次全発言 一九七〇～一九七八』、集英社、一九七八年、四三三頁(初出は、『下野新聞』一九七八年)。
 - 29 中上健次「坂口安吾 南からの光」、『中上健次全集一五』、前掲書、五〇〇頁(初出は、『文學界』一九八五年)。
 - 30 中上健次「風景の向こうへ 韓国の旅」、『中上健次全集一四』、前掲書、一八頁等。なお、「芸術と物語の根」を探るという構想は、当時大ヒットしていた李成愛のアルバムタイトル「演歌の源流を探る」に突きうごかされたものだったと語られている(中上健次・李三郎「なぜパンソリか」、『中上健次未収録対談集成』、作品社、二〇〇五年、四三六頁。初出は、『コリアン☆スター』一九七九年)。
 - 31 中根隆行「中上健次の韓国体験と後期作品群のアジアへの展開」、『比較文学』四〇巻、一九九八年、六五頁。
 - 32 村井紀「南島イデオロギーの発生」、前掲論文、一四頁。

- 33 吉本隆明「南方的要素」、部落青年文化会主催講演、新宮市春日隣保館、一九七八年一〇月七日。『フリーアーカイブ 吉本隆明の一八三講演』
(https://www.1101.com/yoshimoto_voice/speech/sound-a046.html)、ほぼ日刊イトイ新聞、二〇二二年五月一二日確認。吉本が紹介するところのマルクスによる〈アジア〉的概念は、大規模灌漑水利事業を請けおう中央専制国家と閉鎖的な農業共同体、および両者をむすぶ貢納制によって特徴づけられていた。
- 34 中上健次「物語の系譜 上田秋成」、『中上健次全集一五』、前掲書、一七三頁（初出は、『國文學 解釈と教材の研究』一九七九年）。
- 35 子安宣邦『アジアはどう語られてきたか』、藤原書店、二〇〇三年、一〇二頁。
- 36 久保覚「中上健次は軽蔑に値する」、前掲論文、九頁。
- 37 高澤秀次・永島貴吉「年譜」、『中上健次全集一五』、前掲書、七五九頁。
- 38 中上健次「物語が輪舞する」、『風景の向こうへ』、冬樹社、一九八三年、六六頁（初出は、『韓国文芸』一九八一年）。
- 39 同論文、六六頁。
- 40 同論文、六七頁。
- 41 同論文、六七頁。
- 42 中上健次・尹 興吉『東洋に位置する』、前掲書、一二二—一二三頁。
- 43 日本国内の韓国ブームについて四方田犬彦は、趙容弼による歌「釜山港へ帰れ」がヒットした一九八三年を始点に挙げている（『われらが〈他者〉なる韓国（平凡社ライブラリー）』、平凡社、二〇〇〇年、三一頁）。
- 44 高澤秀次・永島貴吉「年譜」（前掲論文、七六〇—七六四頁）によれば、一九八二年にインド・ニューデリーからイギリス・ロンドンに至る「マジックパス」の旅、一九八三年にフィリピンへの家族旅行、一九八四年にジャカルタ、バリ島、フィリピン旅行などがある。
- 45 中上健次「光と翳」、『中上健次全集一五』、前掲書、三二〇頁（初出は、『すばる』一九八三年）。
- 46 同論文、三三一頁。
- 47 中上健次「南の記憶Ⅰ」、同書、三九四—三九五頁（初出は、『すばる』一九八四年）。
- 48 中上健次「フォークナー、繁茂する南」、同書、五三五—五四三頁（初出は『すばる』一九八五年）。
- 49 山口昌男「文化と両義性」、『山口昌男著作集五』、筑摩書房、二〇〇三年、一一頁（初出は、一九七五年）。
- 50 同論文、八二頁。
- 51 高澤秀次・永島貴吉「年譜」、前掲論文、七六四頁。
- 52 中上健次・篠山紀信『輪舞する、ソウル』、角川書店、一九八五年、六頁。

- 53 同書、六頁。
- 54 同書、七頁。
- 55 同書、四一頁。
- 56 中上健次「土着の子」、『スパニッシュ・キャラバンを捜して』、新潮社、一九八六年、一三頁（初出は、『波』一九八三年）。
- 57 中上健次「世界はベラマッチャ、心はスندگانへ」、同書、八九頁（初出は、『波』一九八四年）。
- 58 同論文、九一頁。
- 59 同論文、九〇頁。
- 60 同論文、八八―九一頁。
- 61 中上健次「スパニッシュ・キャラバンを捜してⅢ」、同書、二〇八頁（初出は、『波』一九八五年）。
- 62 同論文、二〇八頁。
- 63 同論文、二一〇頁。
- 64 柄谷行人・浅田彰・関井光男・高澤秀次・小野正嗣「中上健次と坂口安吾」、『國文學 解釈と教材の研究』二〇〇六年一二月号、五一卷一三号、二八頁。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費 17J11029）の助成を受けたものである。